

柏戸の眞実



⑨

親方生活スタート(下)

佐藤俊監督は「近所

今は縁あって福岡県宗像市在住の元関取暁龍こと大沼弘(66)がふと尋ねてきた。「俊くん元気かな?」

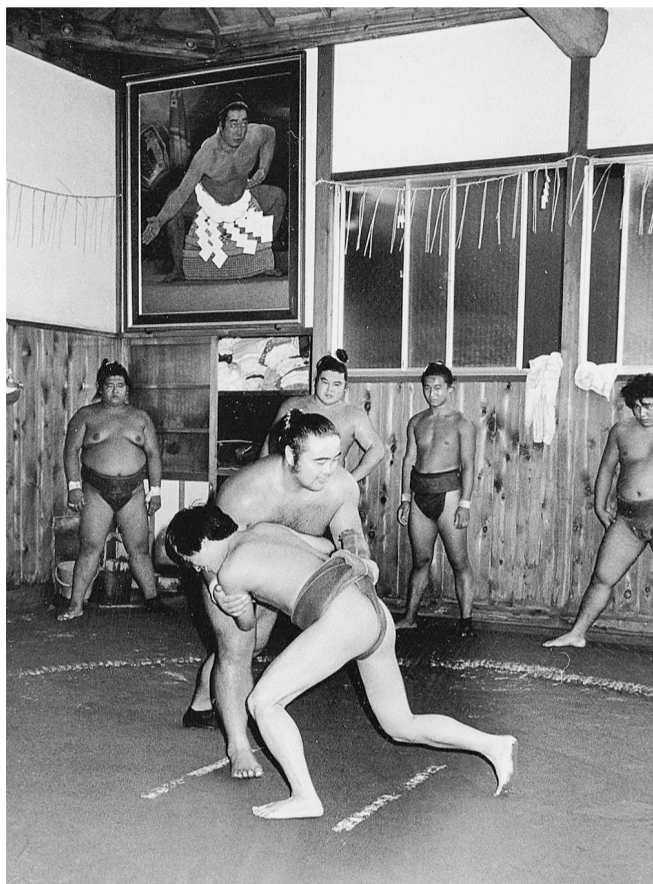
いま鶴岡東の監督をやっている佐藤俊(66)は「はい、元気です」

昨夏の甲子園で鶴岡東を2勝させた青年名將を子ども時代から知っているのだ。11日から夏の甲子園野球の代替大会が始まる。昨秋、東北大会で準優勝し、41年ぶりにセンバツに選出された鶴岡東はコロナ禍で大会が中止となり、今夏へ気持ちを切り替えたが、引き続き中止となった。センバツ選出校が甲子園で1試合で済むことが決まったが現3年生ら部員たちの心情を思



佐藤 俊監督

いやり、佐藤監督の発言は極めて慎重だ。一方で旧藤島町長沼地区で近所同士だった大沼家の弘さんのことになると表情を和ませる。「暁龍さんの入門のきっかけは自分の父とも聞いています」。暁龍自ら記憶をたどると「確かにそうだった」。三川町に在住した鏡山部屋の地元世話人・菅原八雄(製材業)と佐藤監督の父・栄太郎は大工という関係で、昔からのなじみ。「家の近所に相撲大会で素質を見せた中学生がいる」



一般人の相撲挑戦で胸を出した暁龍。背後中央は多賀竜(現鏡山親方)

と弘少年を角界入門への最初の道を開いたのは栄太郎だった。監督が生まれたのは弘の入門2年後の昭和46年だが「小学生の頃、鏡山部屋が鶴岡公園で夏合宿を張っていた時、父に連れられ、暁龍さんに声を掛けてもらった」と監督は思い出す。「力士になれとまでは言われなかったが、印象深い思い出です」と振り返り、同じ藤島中野球部で17歳離れている先輩後輩同士でもある。

弘少年の人権配慮

さて「荘内日報」で「鏡山部屋新弟子第1号」と新聞辞令を「下された」弘少年だが、当時の記事をよく

食堂車も喉通らず

開通したばかりのいなほは3号車にレストランスタイルの食堂車も備えていた。弘少年は親方から食堂車に招かれた際、何を食べたのかも忘れたほど緊張しっぱなしだった。「野球をやりたい俺の人生どうなるの?」でも頭がいっぱいだったわ

本人に任せている」とした。見出しは地元力士誕生を期待した「飛ばし」の要素が強いものだった。

金の卵逃すまい成就

羽織はかま姿の正装で、地元・庄内から新弟子をを迎えにきた鏡山の「金の卵を逃すまい」作戦はこうして成就した。暁龍自身は十

けだが、東京に着くと新弟子がほかにも2人いて気持ち落ち着き、「まずは検査を受けてみよう」と九州場所の新弟子検査に合格。そのうち覚悟を決め、大相撲の世界で生きていくことを決断した。

|| 敬称略 ||
(富樫 嘉美)



いなほ誕生で東京までがグンと近くなった。ホーム上の「急行寝台 天の川」が逆に懐かしい

酒、食事メニュー多彩

○いなほの食堂車は32人収容で4人掛けのテーブルレストラン。ピラテキ、エビライ、スープ、かつ丼、チャーハンなどメニューは多彩で飲み物はアルコールにしても日本酒、洋酒、ビールとそろえ、当時長旅だった東京への列車旅行を満喫できるものだった。

毎週火曜日付に掲載